

災害と日本人の精神性

前林 清和¹⁾

要 約

本論文では、わが国の災害を概観したうえで、日本人の自然観に基づく災害観、人生観と災害、社会倫理観と災害について明らかにした。その内容は次のとおりである。

1) わが国の自然観は、自然と神、人間が隔絶した関係ではなく不可分のものとして捉えられてきた。また、わが国では、自然を「生の基盤」として、つまり風土として捉え、モンスーン型で四季のある風土の中で育まれたしめやかさや激情、攻撃的な無欲さなどが日本人の性格とされる。

このような自然観に立ちながら、理不尽にも降りかかる災害を天運、あるいは天譴として認識し納得しようとしてきたのだ。

2) 日本人の人生観の中核をなすのが無常観である。仏教の影響が大きいですが、もうひとつ災害に常に見舞われてきたなかで、自然の変化や驚異に対して順応して逆らわず生きていこうという意識が養われてきた。この意識が無常観とつながって、日本人独特の諦めやはかなさが生まれたのである。また、阪神・淡路大震災や東日本大震災直後の被災者の列を作って待つ行動や略奪のない街の様子が世界中で賞賛された。このような社会的倫理観の高さは、日本人の理不尽な死の理由の多くが戦争ではなく自然災害にあったことに起因する。さらに、武士道を中心とした廉恥や名誉の観念がその思想的根拠となっていると考えられる。

Key words : 災害, 日本人, 自然観, 災害観, 人生観, 社会的倫理観

はじめに

わが国は、世界でも有数の災害大国である。国連大学が出している「ワールドリスク報告書2014」¹⁾には自然災害に遭いやすい国かどうか(被災可能性)で、日本は世界で4位に位置づけられている。上位15カ国の内、日本とオランダを除くすべての国は開発途上国であり、日本が先進国のなかで如何に災害が起こりやすい国かということが分かる。そして、自然災害のリスクの高さについても世界で17位となっている。つまり、日本は自然災害に襲われやすく、その際のリスクも相当高いと言わざるを得ないのである。また、災害の種類であるが、まず思い浮かぶのが、地震、それに伴う津波、台風、豪雨、土砂崩れ、洪水、火山噴火、豪雪による災害などがあり、枚挙に暇がない。そして、その頻度は、それぞれの災害が毎年のように、しかも時には複数回起こり、全国各地で多くの被害を引き起こしている。

¹⁾ 神戸学院大学現代社会学部社会防災学科

このような常に災害の危険に曝された地に住んでいるわれわれ日本人は、どのように災害と向き合い、生きてきたのであろうか。

本論文では、わが国の災害を概観したうえで、次のことについて論を進めていく。

まず、われわれ日本人は常に、災害に見舞われてきた。それにもかかわらず、「災害は忘れた頃にやってくる」といわれるように、われわれはすぐに過去の災害を忘れてしまう。しかも、ほんの三十年～五十年前の災害ですら、実際に大きな被害を被った人以外の多くの人々は日常生活のなかで記憶の彼方へ追いやってしまっている。また来るであろう災害に対して備えをしなければならないのに、なぜ忘れるのだろうか。そこには、あまりにも災害が多いから「災害はあたりまえのこと」「自然のなす業でいちいち気に留めていてもしかたがない」という考え方が、われわれ日本人の心の中に根付いているのではないだろうか。このことについて、日本人の伝統的な自然観を考察したうえで、その災害観について文献をもとに明らかにする。

次に、われわれ日本人は、災害の中で生きてきたのであるが、それを前提とした人生とはどのようなものなのか。そこには、日本人特有の無常観が流れていると考える。このあたりのことを宗教的背景を中心に明らかにしていきたい。さらに、私たちは、災害時にどのようにふるまってきたのか。海外から日本人の災害時の民度の高さが称賛されるが、緊急事態の際の社会的倫理観について死生観や武士道思想などを手掛かりに考察し、明らかにしていきたい。

1. 日本と災害

1) 地震・津波

わが国の国土は、世界全体の陸地のわずか0.3%でしかない。しかし、マグニチュード6以上の地震の発生数は、世界の約20%にもなる。

なぜ、そんなに地震が多いのかと言えば、日本周辺では、海のプレートである太平洋プレート、フィリピン海プレートが、陸のプレートである北米プレートとユーラシアプレートの方に向かって1年間に数cmの速度で動いており、陸のプレートの下に沈み込んでいる。このために日本の周辺では、4つのプレートによって複雑な力がかかっており、世界でも有数の地震多発地帯となっているのである。具体的には、プレート間地震や海洋プレート内地震、陸域の浅い地震(活断層)、さらには火山活動による地震が頻繁に起こっているのだ。その中で、プレート間地震やプレート内地震のように海底下で大きな地震が発生すると津波が発生するのである。⁽²⁾

記憶に新しい地震災害としては、東日本大震災や阪神・淡路大震災があり、それぞれ未曾有の災害と称されているが、歴史的に見て「未だかつてあらず」ではないのである。

また、2011年の東日本大震災は大津波が押し寄せ2万人近くの死者不明者がでて多くの被害が出たが、津波についても有史以来頻発している。明治以降でも、1896年の「明治三陸地震」、1933年の「昭和三陸地震」、1993年の「北海道南西沖地震」の際も大津波が襲来し、多くの人命を奪ったのである。

わが国では、地震や津波は頻繁に起こっており、むしろ、阪神・淡路大震災が起きるまでの約40年間、大きな地震災害が起こらなかつたことの方が珍しいと言えよう。この期間は、わが国が奇跡的な経済成長を成し遂げた時期と重なっている。このことは基本的には幸運なことであるが、われわれ日本人が地震の恐ろしさを実感として忘れてしまった時期とも言えるのではないだろうか。この時期に、わが国は原子力発電を手掛けてきたのである。

現在は、地震活動期に入ったと言われ、これからも大きな地震が頻発する可能性が高い。特に、首都直下地震や南海トラフ巨大地震は近い将来、確実に起こると予想されている。

2) 台風

日本は、台風の通り道と言われるほど、毎年、台風の被害に見舞われている。台風は、北西太平洋や南シナ海に存在する最大風速17.2メートル以上の熱帯低気圧のことで、年間、平均25.6個発生し、そのうち11.4個が日本に接近し、2.7個が上陸している。(1981年～2010年)特に、7月～9月に集中しており、毎年、多くの被害を出している。⁽³⁾

台風の被害は、暴風や風による建物や樹木の倒壊といった風害だけではなく、高潮、高波、落雷、大雨による洪水や浸水、土砂崩れ、地滑りなど多様である。

3) 水害

日本は、世界でも多雨地帯であるモンスーンアジアの東端に位置し、年間平均1,718ミリメートルの降水量がある。これは、世界平均の約2倍に相当する。その上、梅雨や台風の時期に集中しているため水害が起りやすいのである。さらに、近年、温暖化の影響もあって、1時間に100ミリを超える集中豪雨が各地で頻繁に起こっている。

しかも、日本列島は標高二千メートルから三千メートルの脊梁山脈が縦貫しており、河川が急こう配で距離が短く流域面積も少ないため、短時間で増水し、洪水の危険性が極めて高い。たとえば、利根川の場合、洪水時の流量が平常時の流量の百倍に達するのに対し、アメリカのミシシッピ川では三倍、ヨーロッパのドナウ川では四倍にしかない。⁽⁴⁾

4) 土砂災害

わが国では、平均して1年間に約1,000件もの土砂災害が発生している。土砂災害には、大雨や地震による崖崩れ、土石流、地滑り、火山の噴火に伴う溶岩流、火砕流、火山泥流などがある。わが国は、傾斜が急な山が多く、先に述べたように台風や大雨、地震などの災害が多く、土砂災害が発生しやすい国土環境にある。したがって、ほとんどの都道府県で土砂災害が発生しており、土砂災害が発生するおそれのある危険箇所は、日本全国で約53万箇所もある。⁽⁵⁾

5) 火山災害

わが国には、この狭い国土の中に活火山が110もある。世界に約1500の活火山があると言われていたので、そのうち7%以上が日本にあることになる。火山の噴火は、様々な被害を引き起こす。その主なものは、大きな噴石、火砕流、融雪型火山泥流、溶岩流、小さな噴石・火山灰、火山ガスなどである。さらに、噴火により山腹が崩壊し海に土石が流入、あるいは海底火山の噴火によって津波が発生する場合もある。

火山噴火は、近年、起こっていなかったが、東日本大震災以降、全国各地で火山噴火が相次いでおり、「大規模噴火の準備段階」に入った可能性もあると言われている。110の活火山の内、47の火山は100年程度の間には噴火の可能性があるとされ、警戒が必要である。⁽⁶⁾

そのほかにもわが国では、近年多発している竜巻、大雪による雪害なども毎年深刻な被害を引き起こしている。

2. 日本人と自然観、災害観

1) 自然観

①西洋的自然観と東洋的自然観

日本人の自然観を明らかにするために、まず西洋的な自然観と東洋的な自然観の特徴を明らかにすることからはじめよう。

西洋の自然観の中核をなすのは、中世におけるキリスト教的自然観である。

キリスト教は、一神教であり、神は全ての創造主で唯一絶対の存在であるとする。人間も自然も世界のありとあらゆるものが神によって造られたのだ。旧約聖書の「創世」に、神は天地や動植物などの自然を創世し、最後に自然を支配して統治する存在として人間を造ったとある。つまり、キリスト教的自然観は、絶対的な存在としての神、その下に自然を支配する人間、そして最も下位に自然という構造である。したがって、中世では、自然は人間が利用するために創られているという観念がヨーロッパ人の意識の中に浸透していたのである。

近世になり、キリスト教的自然観の基礎の上に立ちながらも、キリスト教の信仰に依存して真理を獲得するという中世の考え方を脱却した思想が、フランス生まれの大哲学者で近世哲学の祖と言われるルネ・デカルト (1596年～1650年) により唱えられた。それは、自然と人間を別の物として考える物心二元論であり、自然と人間を対立するものと捉えたのである。それでは、もう少し詳しく見てみよう。

デカルトは、「長さ幅および深さある延長は、物的実体の本性を構成し、思惟は思惟実体の本性を構成する」⁽⁷⁾と述べ、精神と物質は本来的に異なるものとして規定した。このデカルトの世界観、人間観が、自然科学に則った近代文明の驚異的な発展の思想的根拠となり、現代の科学技術や医学の発展に大きく貢献してきた。もともとキリスト教では人間は靈魂と肉体からなり、靈魂を崇高なもの、肉体を卑しいものとして捉えてきた。近代に入りデカルトは宗教的観点からではなく哲学的な考察に基づく世界観・身体観を構築したが、やはりキリスト教の伝統を引き継いだといえる。

では、なぜこの二元論が、近代文明を作り上げてきたのか。デカルト以前の世界観は、物質には靈魂が宿っており、自然は生きているというアニミズム的世界観であった。このアニミズム的世界観を思想的に克服したのが、デカルト的二元論なのである。精神と物質を原理的に全く別の物として区別したことにより、自然や自然現象を靈的なものから切り離し、定量的に、数学的に扱い、測定・実験することで世界のあらゆる事物を全て因果関係によって科学的に説明する態度と方法が確立したのである。たとえば、かつてドイツの森には妖精がいた。したがって、むやみに森の木を切れば、罰が当たると信じられていた。しかし、この空間に3次元で存在する物は物体でしかない。つまり、精神、あるいは神や靈は空間には存在しないのである。そうなると話が違う。森は単なる物体であり、その物体としての自然を人間が何をしようが勝手である。罰が当たることもない。自然とのつながりを考える必要もない。自然は人間によって克服できるものなのだ。そういうことで、人々は欲望の赴くまま、豊かさや便利さを求めて、木を切り開きどんどん住処をふやし、町をつくり、工場をたて、交通網をめぐらしてきた。また、物体一つにしても、それまでは姿形や重量が同じでも、それぞれに固有の靈が宿っていると考えられていたため、それぞれが違うものであると考えられていた。しかし、物は物でしかなくなったため、測定値が同じならば、全て同一の物と見なすことができるようになった。このことで、自然科学が急速に発

達したのである。

この考えに基づいて多くの学者が、自然を客観的に分析して原理や法則を発見するようになった。そして、自然科学では、自然は明確に人間と切り離され、神や生命とも無縁のものとして機械的な法則によって動くだけのものとみなされるようになったのである。これを機械論的自然観という。機械論的自然観は近代自然科学の発展に大きく寄与し、科学や技術の飛躍的な発展と産業化を生んだのだ。このことは、観点を変えると、人間が自然と対峙し、自然を支配・管理し、自然を破壊しながら利用するという人間にとっての利益誘導型自然観と捉えることができる。このような自然観に基づく現代は、われわれに豊かな生活や便利な社会をもたらしてくれたと同時に、地球環境問題や生命倫理問題を生じさせている。たとえば、地球環境問題としては、工場から排出される汚染物質による大気汚染や水質汚濁など、豊かさや便利さの追求が皮肉にも人間が住み辛い環境を生み出しているのである。また、生命倫理問題としては、医学の発展により生み出されたクローンや代理出産などが人間の存在そのもののあり方の根底を覆そうとしている。

それに対して、東洋はアニミズム的宗教観・自然観で彩られている。どういうことかと言えば、この世はありとあらゆるものに神や精霊が宿っているという観念である。その中でも、わが国の宗教観は特徴的である。神道は「八百万の神」というように世界には無数の神々がいると考えられている。いわゆる多神教である。それらは、自然崇拜による自然神や日本神話の神々、人格神などがある。自然崇拜とは、最も原初的な宗教観で、自然物や自然現象そのものを崇める宗教意識である。たとえば、天や大地、太陽、月、火、山、石、岩、生殖器などが神とされた。また、これらの自然崇拜は、人間や動物、植物、石など万物に精霊や靈魂が宿るとするアニミズムとも関連が深く、共に広く信仰されてきたのである。また、天皇や政治家、文化人、軍人、学者なども人格神として祀られてきたし、祖先の霊を信仰する祖霊信仰もある。さらに、神道だけではなく陰陽道（道教）の神々や民俗信仰の神々、大乘仏教の仏や、仏教由来の神や習合神など、様々な神祇的なものを神と捉え、それらをも含めて八百万の神としたのである。

このようにわが国の自然は無数の神によって彩られており、「日本人は、神は人間以上の力をもつが、人びとを威圧して支配することはないと考えてきた。神も人間も平等な価値をもつ靈魂とされたからだ」⁽⁸⁾というように神とともに生きてきたのである。このように日本では、自然と神、人間が隔絶した関係ではなく不可分のものとして捉えられてきたのだ。

一方、思想的にも東洋、特に東アジアでは自然がそのまま真理であり、人間も自然の一部であるということを前提とした気に基づく一元論的自然観が展開されてきた。中国では、古代より気は天地万物全ての根源とみなされ、宇宙は全て気で構成され機能しているという宇宙論、世界観が構築されていた。天地万物には、もちろん人間も含めて全ての生命が含まれている。したがって、人間も気によって出来ており、心の働きも気によるものと考えられてきた。たとえば、中国の古典である『周易』には、「一陰一陽之謂道」⁽⁹⁾とある。この意味は、天地万物全てが陰と陽の2つの気が対立して変化交替するなかで存在し機能しており、その陰と陽の働きの法則やパターンを道というのである。この陰と陽は気の状態の違いによるものであり、つまるところ世界の全ての事象は気の変化によるものとする。もう少し詳しく言えば、陰の状態の気と陽の状態の気の組み合わせで、世界のあらゆる物が作られ、また変化、作用していると考えられてきたのである。例えば、陽の気は上にあがり陰の気は下にさがるか、天は陽で地は陰とか、日は陽で月が陰、男は陽で女は陰、というように、天地万物のすべての事象を気の状態の違いによる変化として捉えるのである。

陰=静, 死, 閉, 下, 後, 北, 地, 女, 臣, 月, 夜, 柔など

陽=動, 生, 開, 上, 前, 南, 天, 男, 君, 日, 昼, 剛など

このように中国では、気論にもとづく世界観、自然観が構築されていたため、必然的に宇宙や自然と人間は、別々のものとして捉えるのではなく、同じもの、連関しているものとして考えられた。

このような自然観はわが国にも継承されてきた。しかし、中国の気が天地万物全ての根源、現象とみなすような壮大なコスモロジーとして理論づけられているのに対し、日本の気はもっと人間にとって身近に感じ取れる感覚的なものとして捉えられてきた。また、中国の気が物質的側面を強調するのに対し、日本では気を「雰囲気」というような私にとっての主体的な場（空間）として、つまり自分自身がその空間を形成している存在として捉える自然観が重要視されてきた。

以上、われわれ日本人の自然観は、多神教による自然観と気論に基づく自然観が相まって、「私」も自然の一部であるということを前提として自然を捉えてきたのである。

②風土という捉え方

われわれ日本人は、自然を風土として捉えてきた。そこに着目して、和辻哲郎は名著『風土』を著している。和辻は、風土とは、「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である」⁽¹⁰⁾と述べている。そして、この気候や気象、地質といったものは自然環境、つまり客観的な自然環境、われわれをとりまく環境としてではなく、われわれ人間そのものが自然の一部として生活してきた。われわれの生活の中にある直接の事実としての問題として自然をとらえる、それが風土なのである。したがって、われわれは自然対人間という対立関係にあるのではなく、自然のなかの人間、自然としての人間として生きているのである。これは、先に述べた古来の日本人の自然観と同じ感性である。

具体的に和辻は、「寒さ」という例を出して説明している。寒さとは、温度計で示される冷たい空気存在、客観的な存在としての寒気のことではない。私たちが生活の中で実際に感じ取っている寒さのことである。私たちは外界と関係を持たずに成立した存在ではなく、初めから外界との関係性のなかで、寒さを感じて生きている。つまり、志向的な存在として人間はあり、人間の存在は自然への志向性を持つ、あるいはそういう構造をもつものとして、その全体を「風土」と捉えるのである。そのような意味での風土こそわれわれの「生の基盤」であると和辻は述べている。たとえば、人間は寒いからジャンパーを着て肩をすくめる。これら全体が風土としての寒さなのである。

そのうえで、アジアからヨーロッパに至る地域を風土の観点から東・東南アジアの「モンスーン」、中東・アフリカの「砂漠」、ヨーロッパの「牧場」の三つの類型に分けている。そして、モンスーンは湿度が高いため、恵みも多いが天候が急変し早魃や洪水で飢饉も起こるため、自然に対して忍従、受容する性格になったという。砂漠は、乾燥という気候に対抗しないと生きていけないため攻撃的な性格が形成され、宗教的には一神教を生み出すことになったという。ヨーロッパ型の牧場は、気候が穏やかで、人間によって支配され征服されやすいため合理的な考えが生まれたとしている。そのなかで日本はモンスーン型であるが、四季があり、特に夏の「台風」と冬の「大雪」が並存する。したがって、日本人の国民的性格を台風の性格と規定し、その特徴を「しめやかな激情、戦闘的な恬淡である」⁽¹¹⁾としている。

2) 災害観

災害、特に自然災害については、日本人は今述べたような自然観に立ちながら、その自然の一つの現象として地震や台風、雷が起こると捉えてきた。このような災害について日本人がどのような災害観を持ってきたのか考えてみたい。⁽¹²⁾

昔から日本人は、災害を人間にはどうしようもない自然のなせる災いとして捉えてきた。災害、特に天災はいつ起きるか、どこで起きるかは誰にも分からないし、分かったとしてもそれを止めることは不可能である。そういう意味で大自然の脅威は不可抗力な存在なのである。実際に、筆者は阪神・淡路大震災を経験し、神戸の街が破壊され燃え落ちた中に立ちすくんだ時に、また東日本大震災の直後に支援活動に駆けつけた際に、街の全てが流された光景を目の当たりにした時に、大自然の脅威とともに不可抗力の自然の力の存在を感じた。

もちろん、我々は昔から手をこまねいていたわけではない。その時代時代の知恵や技術によってできるだけ被災しないように、できるだけ被害が少なくなるように努力し対応してきたが、所詮、人間のできることには限界があり、たいしたことはできない。このことは今も昔も基本的には変わらない。

しかし、われわれはそれだけでは納得することができない。どういうことかということ、災害時には、「何故、私や私の地域に天災が起きたのか、他の地域で起きればいいじゃないか」、「彼は、まじめに正直に生きてきたのになぜ死ななければならないの」というように、自分たちの身に降りかかった不幸をそう簡単には認めることはできないのだ。人間という動物は、理不尽な出来事を納得するために何らかの理由が必要なのである。

その理由として私たち日本人が掲げてきたものに、天運論と天譴論の二つがある。

①天運論

災害が起きた時、助かった人の多くは、「隣の町では被害が出ていないのに、何故私の街だけが被害をうけるのか」、「地震で家が倒壊して、家族が亡くなったのに、私だけが助かったのはどうしてなのか」というように助かったにもかかわらず嘆き悲しむ人が多くいる。この理不尽な突然の不幸な出来事を偶然という言葉だけでは納得いかない。それが必然でなければならないのである。その必然性が、「天運」であり「運命」なのである。つまり、「私が被害を受けて彼は被害を受けなかった」「彼が死んで私は生きている」というのは、運命であり人間がどうすることもできない天命によってあらかじめ決められていることなのだというのである。

次に、誰が、何がその災いを引き起こしたのかということが問題となる。古代から、様々な自然災害は「荒ぶる神」によるものと考えられてきた。荒ぶる神は、山や海や川など様々な場所に居て、人間に災いをもたらしたのである。たとえば、雷は、古代から雷神によるものと考えられてきたし、台風や突風などは風神によるものと考えられてきた。また、われわれもよく知っているのが地震を起こす鯨である。このことについて、野本寛一氏は、「地下の巨大鯨が地震を起こすという俗信は近世、根強く信じられ、その鎮めとして地震のたびに大量の『鯨絵』が発売された」⁽¹³⁾と述べている。今でも、鯨が地震を起こすという観念は信じられているとまでは言わないが、われわれ日本人の心の中に根付いている。なお、鯨だけではなく、雉や蟹が地震を起こすという伝承も残っているという。さらに、山崩れについては、長野県、山梨県、三重県、静岡県などでは大蛇の仕業で起こると言い伝えられており、奈良県には法螺貝によるものだという言い伝えが残っている。このように、私たちは人間の能力をはるかに超えた災害の原因を神や動物によるも

のとして捉え、納得してきたのである。そこには、先に述べたような自然観、つまり神道的なアニミズムの世界が広がっている。

②天譴論

天譴論とは、「天が人間を罰するために災害を起こすという思想」⁽¹⁴⁾であり、「もともとは、災害(地震)を『王道に背いた為政者に対する天の警告』とみなす思想であった」⁽¹⁵⁾というものである。天平6年(734年)、大阪で大地震が発生し多くの犠牲者がでたが、その時の天皇である聖武天皇は、「朕が訓導の不明に由り、民多く罪に入る。責は予一人に在り、兆庶に関かるに非ず」(続日本書紀)と述べ、地震が起きた責任は自分にあるとし、大赦をしている。また、江戸時代の思想家、安藤昌益は天譴思想を説いた。その後、関東大震災直後も天譴論が、多くの著名人から唱えられた。たとえば、当時の財界のリーダーであった渋沢栄一は、新聞のインタビューで、次のように述べている。

「大東京の再造についてはこれは極めて慎重にすべきで、思ふに今回の大しん害は天譴だとも思はれる。明治維新以来帝国の文化はしんしんとして進んだが、その源泉地は東京横浜であつた。それが全潰したのである。しかしこの文化は果して道理にかなひ、天道にかなつた文化であつたらうか。近來の政治は如何、また経済界は私利私欲を目的とする傾向はなかつたか。余は或意味に於て天譴として畏縮するものである。」⁽¹⁶⁾

また、内村鑑三は、「時々斯かる審判的大荒廃が降るにあらざれば、人類の墮落は底止する所を知らないであらう」とキリスト教の思想に基づいて述べている。⁽¹⁷⁾

このほかにも、山室軍兵や北原白秋なども天譴論を唱えているが、その内容は為政者による悪政というのではなく、腐敗した社会や国民に対する天罰という意味で使われた。東日本大震災の直後に石原慎太郎は「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を1回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思う」⁽¹⁸⁾と述べ、天譴論を展開した。(なお、その後撤回、謝罪している)このように天譴論は古代から現代にいたるまで内容の違いはあるが、大きな災害がある度に言われてきたのである。天災は神が私たち人間を戒めるために起こすという観念によって自分に降り注いだ災いを理由づけし納得してきたのである。このような天罰という考え方は欧米でも昔からあるが、それは一神教におけるもので、神との契約を破ったための天罰であり、そうとう厳しいものとして捉えられてきた。それに対して、日本の場合、荒ぶる神を鎮めることで収まるという考え方であり、その怒りに根深さはない。荒ぶる神は、荒魂(あらたま)と同時に和魂(にぎたま)も持ち合わせているのである。

3. 日本人と人生観・社会倫理観

1) 人生観

前節で述べてきたように、日本人は自分自身に災害が降り注ぐのは運命であったり、罰が当たったりということで納得してきた経緯がある。この「諦め」や「はなかなさ」の感性の奥には、無常観があるとと言われる。

ここでは、日本人の人生観を特徴づける「無常」について、考えてみよう。

「無常」とは、仏教用語であり、この世界の全てのものは生滅変化して留まることがない、という意味である。

つまり、この世に不変なもの、永遠に変わるものがないものなどないということである。した

がって、物や出来事に固執しても仕方がない、意味がないということになる。なぜならば、全てが変わっていくからである。どれほど立派な豪邸もいつかは朽ち果てる。今幸せでも明日はどうなるかわからない。今繁栄していても一瞬にして全てが無くなってしまふかもしれない。逆に今は貧しくとも明日は金持ちになるかもしれない。今までは失敗ばかりだが何時かは成功するかもしれない。だから、私たちは今を生きるだけなのである。今を一生懸命生きることしかできないのだ。「今」の連続が人生であり、その流れは刻々と変化していくのである。仏教の祖である釈迦は、「諸行無常」、つまりこの世に存在するものは全て移り変わっていき永久不変なものはない、と説く。

わが国において無常観は、中世以来の宗教、文学において培われた思想あるいは美意識である。道元禅師は、菩提心の契機は観無常心にあると説いている。つまり、悟りを開き、世の中を救おうと修行する契機は今述べた無常の心にあるという⁽¹⁹⁾。ここにも、無常を単なる消極的な変化として捉えるのではなく、変化を前提にやるべきことをやるという気概が感じられる。また、災害との関係が見て取れる無常観としては、鴨長明の『方丈記』がある。その冒頭で「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある、人と栖(すみか)と、またかくのごとし⁽²⁰⁾。」と著し、人生の無常を説いている。そして、その内容の多くは長明が実際に体験した、一一七七年の大火、一一八〇年の竜巻、一一八一～一一八二年の飢饉、一一八三年の大地震であり、その様子が克明に記されている。長明の無常観は、このような体験からきているのではないだろうか。地震に関する記事の一部を記しておこう。

又同じころかとよ、おびたしく大地震振ること侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土さけて水わきいで、巖われて谷にまるびいる。渚漕ぐ船は波にたゞよひ、道ゆく馬は足の立ちどをまどはず。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、ひとつとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立上りて、盛りなる煙の如し。地の動き、家の破るゝ音、雷にことならず。家の内にをれば、忽ちにひしげなんとす。走り出づれば、地われさく。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らむ。恐れのかなに恐るべかりけるは、只地震なりけりところぞ覚え侍りしか。⁽²⁰⁾

(また元暦二年(1185年)のころ、大地震が襲った。その様子は尋常ではなかった。山は崩れて川を埋め、海では津波が発生して陸地を襲った。地面は裂け水が湧き上がり、岩は割れて谷に落ちた。渚をこぐ船は波に漂い、道を行く馬は足元が定まらない。都のあたりでは、至る所で御堂や仏舎利塔などひとつとしてまともなものはない。あるものは崩れさり、あるものは倒壊する。そして塵が舞い上がり煙りのようである。地面が揺れ家が壊れる音は雷のようだ。家の中に居たなら忽ち押しつぶされかねない。走って飛び出せば地面は割れてしまう。人は羽をもたず空を飛ぶことはできない。また龍であったら雲に上るのだがそれもできない。恐ろしいもののなかで特に恐るべきものは地震だと実感した。)

それでは次に、日本の四季に代表されるような変化する風土と圧倒的な自然災害による人間の無力さの自覚から無常観についてヨーロッパとの比較から検討してみよう。ヨーロッパの自然は、安定している。ヨーロッパのほとんどの地域では大きな地震は起こらないし、台風もない。

また洪水も日本のような激しいものは少ない、など自然が猛威を振るうことの少ない地域であり、人間が作り上げてきたものがそのまま存続しやすい環境と言える。事実、千年、二千年前の多くの建物や文化財が残っている。それに対して、日本は地震や台風による天変地異は人間が営々と積み上げてきた全てのものを一瞬にして無にしてしまう。まさに無常なのである。寺田寅彦氏は、「日本の自然の特異性が関与しているのではないかと想像される。すなわち日本では、第一に自然の慈母の慈愛が深くその慈愛に対する欲求が満たされやすいために住民は安んじてそのふところに抱かれることができる、という一方ではまた、厳父の厳罰のきびしさ恐ろしさが身にしみ、その禁制にそむき逆らうことの不利をよく心得ている。その結果として、自然の十分な恩恵を甘受すると同時に自然に対する反逆を断念し、自然に順応するための経験的知識を集積し蓄積することをつとめて来た」⁽²¹⁾と述べている。つまり、自然は刻々と変化し、その変化によってある時は恵が、ある時は災いがもたらされる。恵はありがたく頂き、災いには逆らわずじっと耐えるということである。自然に順応し、逆らわずに生きようということである。寺田氏が「地震や風水の災禍の頻繁でしかも全く予測し難い国土に住むものにとっては天然の無常は遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑にしみ渡っているからである」⁽²²⁾と述べているように、まさに日本人の人生観は無常に基づいていると言える。

このようにわが国の人生観は、先に述べた人間も自然の一部であるという神道的な世界観や仏教における無常、頻繁に起こる天災への順応的態度が相まって、無常観を基底に形成されてきたと考えられる。

2) 社会倫理観

阪神・淡路大震災や東日本大震災直後の被災者の行動は、世界中から称賛され、感動の言葉がよせられた。どういうことかと言えば、海外では、多くの場合、大災害後には暴動や略奪が大量発生し、社会が無秩序化するのが当たり前である。それに対して、日本では、暴動も略奪も起こらない、それどころか被災者たちは水や食料の配給を、列を作り並んで待っている。順番を抜かそうとする人は誰もいない。日本人は、パニックになるどころか、平常時以上に冷静に行動して助け合ったのである。

このような行動に対して、世界中から称賛の声が上がった。そのいくつかを、東日本大震災関連記事から紹介してみよう。

2011年3月15日付でAFPは、「悲劇の中、日本に集まる世界の称賛」と題して「大震災と巨大津波による二重の惨劇から立ち直るとき、日本の国際的な評価はいっそう高まるに違いない。日本という国の芯の強さに世界の称賛が向けられている。世界中のテレビには、がれきとなった家屋や車をあたかもおもちゃのように津波が押し流し、変わり果てた荒地に放心状態でさまよう被災者の姿が映し出されている。しかし、映像はもうひとつの側面も世界に伝えた。消息を絶った家族を探しながら、生活必需品が届くのを待ちながら、冷静さを失っていない日本人の姿だ。そこには略奪や暴動の素振りもない。半分空になった店の前でさえもきちんと並ぶ住民の姿に、英語圏のインターネット・コミュニティは、日本人は『冷静だ』と目を見張り、欧米諸国で同規模の地震が起きた場合にこうできるものだろうかという驚き書き込まれている。」⁽²³⁾と述べている。

また、CNNも3月12日付で、「震災下でも『文化に根ざす規律』」と題し、東京滞在の米学者の話として、「略奪行為も、食料を奪い合う住民の姿もみられない。震災下の日本で守られる規律

は、地域社会への責任を何より重んじる文化のたまものか——。東京に滞在している米コロンビア大学の日本研究者は、大地震への日本人の対応をこう評価した。」⁽²⁴⁾
と称賛している。

さらに、3月16日付の共同通信は、「略奪起きない日本を称賛 大震災でアルゼンチン紙」という記事で、「『なぜ日本では略奪が起きないのか』。南米アルゼンチンの有力紙ナシオン（電子版）は16日、東日本大震災の被災地で、被災者らが統制の取れた行動を取っていることを驚きを持って報じた。」⁽²⁵⁾とある。

それでは何故、日本人は秩序だった行動ができるのか。その理由は、日本人の社会倫理観にある。どういうことかと言えば、日本人は甘んじて死を受け入れる、仕方がなかったこととして諦める死生観を持っているのである。なぜならば、先に述べた無常観に基づく人生観があるからである。そのため、災害時の近い人の死に対する恨みや理不尽さの行き場のなさをぶつけようという意識は少ないのだ。人の死や財産の消失などが起きた時に恨みや怒りがこみ上げるのではなく、諦めるという場合はエネルギーが高まり燃え上がるというような状態になるのではなく、むしろ荒ぶる神を鎮める側、エネルギーを制御する立場に立っているのである。したがって、冷静で落ち着いた態度でいられるのである。

ところで、人の死を仕方がないこととして受け入れられる背景について、死生観の視点からもう少し深く考えてみたい。人間は全ての人が何時かは死ぬのであり、そういう意味では仕方がないことで、いくら悲しくても受け入れるしかない。しかし、理不尽な死、突然の死については、そう簡単には受け入れがたい。特に、理不尽な死の代表的なものは、災害での死と戦争や紛争などの殺し合いによる死である。この理不尽な死について、大石久和氏は、日本人は死を受容し、他国は死を拒否するという。その理由として日本人の死は災害による死であり、恨む相手がいないから受け入れるしかない。それに対して、他国の死は紛争による死であり、死んだ者も恨みながら死に、残ったものも殺した相手を恨み復讐を誓うというのである。したがって、正義のためには血を流しても仕方がないという思想があるのだと述べている。⁽²⁶⁾この死に対する考えは少し乱暴であるが、言い得て妙である。実際にわが国は古代から先に見たように常に災害に見舞われ多くの人々が命を落としてきた。それに対して、わが国は島国であり、他民族との戦争は江戸時代までだと飛鳥時代の白村江の戦いと鎌倉時代の元寇、豊臣秀吉の朝鮮出兵ぐらいしか見当たらない。国内での戦（いくさ）は、基本的に大量虐殺や皆殺しというようなことはなかった。たとえば日本における最大の合戦である関ヶ原の戦いでも双方合わせて二十万人近くの兵士が戦ったが、諸説はあるものの死者は六千人から八千人と言われている。他の合戦も基本的には多くの犠牲者を出さずに勝敗が決していたようである。その理由は、わが国の戦は、政治的理由によるもので、民族間の戦いや宗教戦争ではないからである。また、農民を兵士として雇っており、原則として合戦は農閑期に行われていた。つまり、合戦より耕作の方が優先されていたのである。領主にしてもいくら戦に勝っても農民の多くが犠牲になっては自国の繁栄にはつながらない。なぜなら、戦で農民が多く死ぬとせっかく勝利してもその土地を耕すことができないことになり、意味がない。それはどちらの領主も同じ事情であった。したがって、お互い少し被害が出たところで雌雄を決していたのである。しかも、江戸時代になると二百数十年間、ほとんど戦のない時代が続いた。したがって、わが国における理不尽な死は、戦争による死より圧倒的に災害や二次災害的に起こる飢饉による餓死や病死が多かったのである。したがって、人が理不尽に死んだ際

の生き残った人間の感情は恨みより諦めが中心となっていったと考えられる。

また、個人の欲より社会規範を重んじる社会観が昔から形成されてきたという経緯がある。ここでいう社会規範とは神との契約とか独裁者からの弾圧によるものとは違う。自分たちの生活のなかから生まれてきた規範である。その理由は、日本人が農耕民族だからである。農耕社会では、一人や一家族では十分な生活を営んでいくのは難しい。したがって、農作業は村全体で行い、日常生活も家単位ではなく村単位で営まれてきたのである。そのような社会では、個人の意思や利益よりも村全体の意志や利益が優先されてきた。臨床心理学的に言えば、日本人は、西洋的自我、つまり他者から独立した「私」ではなく、他者とつながった「私」で生きてきたのである。したがって、災害などの非常時においても、皆が個人の欲望をおさえて全体の秩序を守ることが美德とされてきたのである。

さらに、わが国には、もうひとつ日本人の精神性を代表する武士道がある。この武士道こそが、極限状況におかれた時の人間の行動を律する行動規範として機能してきたのである。わが国は鎌倉幕府以来、江戸幕府が終焉する大政奉還までの700年近く、事実上武士による政権、つまり軍事政権が続いた世界でも類をみない特殊な国なのである。したがって、武士は単に武人としてだけではなく為政者として行政官として、時には文化人として機能してきたのである。そして、その過程で高い教養を身につけ、世の中の範となる人格を目指して自己陶冶の道を歩んできたのだ。そのことが、武士が政権を長期にわたって維持してきた大きな要因である。特に、自己陶冶そのものが自己の内面の向上だけにとどまらず、社会や他者のために生きるという精神性にまで昇華した点にある。それが武士道という倫理規範であり、行動規範である。思想的には、神道と仏教、特に禅思想に大きな影響を受けて形成され、江戸時代に入ると儒教と融合することで武士の実践倫理として定着していったのである。

ところで、明治政府によって、士農工商の身分差別が廃止され、武士階級は消滅した。しかし、その武士道思想は武士の世が終わってから、かえって国民全体に浸透していったと考える。どうということかと言えば、それまで武士は人口の7%程度しかいなかったといわれている。それが、四民平等となり、法的に国民全体が苗字を持ち、家族制度が法制化し、国民全体が学校教育において儒学的教育、時には武士道的色合いの強い教育を受けるようになったからである。したがって、武士道は現代の日本人の思想的底流をなしていると考えられる。

武士道では、忠義、勇敢、犠牲、信義、礼節、名誉、質素、情愛などを説くが、その一つに廉恥がある。

廉恥とは、心が清らかで恥を知る心を意味する。わが国では、伝統的に恥を知ることが重要とされてきた。

10世紀半ばに起こった平将門の乱の顛末を描いた『将門記』には、「現在に生きて恥有らば、死後に誉れなし」⁽²⁷⁾とあり、生きている間に恥ずかしいことをすれば、死後の名誉はない、というのである。ここでは、恥と名誉の関係が述べられているが、武士の生き方、死に方の根本であった。名誉を守るためには名を汚さないことであり、そのためには廉恥、つまり心を清らかにして恥を知り、恥じることをしないことが求められたのであった。しかも、それは自分が死んでからの名誉も含めてであり、生死を超えた次元での実践哲学である。さらに、『平治物語 (1159)』には、「弓矢取る身は、敵に恥を与へじと互ひに思ふこそ、本意なれ」⁽²⁸⁾とある。つまり、武士というものは敵に対しても恥をかかせないようにとお互いが思いやることこそが真意である、とい

うのだ。つまり、武士道では、相手の廉恥を慮りお互いの名誉を尊重することを重要視したのである。

また、時代は下るが、新渡戸稲造の著書『武士道』には、武士は名誉を重んじ、「その潔白に対するいかなる侵害をも恥辱と感ずることを当然のこととなした。」というように、恥の観念を重視している。そして、「廉恥心は少年の教育において養成せらるべき最初の徳の一つであった。」⁽²⁹⁾と述べ、恥ずかしいという観念こそが道徳心の根本であるとする。

また、江戸時代の兵法家である大道寺友山(1639年～1730年)が記した『武道初心集』には、「義を行ひ勇を励むとあるに付てはとかく恥を知ると申すより外の心得とては無之候由。」⁽³⁰⁾(義を行い、勇を励む様になるには、兎に角常に恥を知るという心得でいる事以外には無いのである。)とあり、武士が正しい行いをし、勇敢に励むためには恥をしるといふ以外にない、というのだ。

このような武士道における「廉恥」の考えは、儒教の影響が強く、たとえば孟子は、「羞惡の心無きは、人に在らざるなり.」、「羞惡の心は、義の端なり.」と述べている。つまり、恥の心が無いのは人間ではない、と断言し、恥の心は正しい行いをする萌芽だというのである。

わが国の武士は、このような恥の心を大切に生きてきたのである。それでは、恥とはどういうことであろうか。

かつて、ルーズ・ベネディクトは『菊と刀』において、キリスト教文化が「罪の文化」であるのに対し日本の文化を「恥の文化」と捉え、「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行なうのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう。恥は他人の批評に対する反応である。人は人前で嘲笑され、拒否されるか、あるいは嘲笑されたと思ひこむことによつて恥を感じる。」⁽³¹⁾と述べ、日本人が善行を行うのは周りから見られて恥をかかないために行うというように、他人の判断基準で行動するというように表面的な考察をしているが、日本の恥の文化はそのような浅いものではない。

作田啓一は、恥には、大きく分けて2つの側面があるとし、一つは、「見られて恥ずかしい」という意味での恥であり、「公恥」としている。それに対して、「自分自身の内面に問いかけて恥ずかしい」という意味での恥を「私恥」としている。つまり、だれも見えてなくても自分自身の心に照らし合わせてみて恥ずかしいか恥ずかしくないかという判断基準である。⁽³²⁾

つまり、恥という概念は、「人前で恥ずかしいことをしてはいけない」「みんなの前で恥をかかされた」など、周りの目を気にした言葉であり、そのことが社会の規範を形成し、社会を秩序立てる役割をはたしているが、それは同時に自己陶冶の内面的作用でもあるのだ。そして、日本人は、この自己陶冶としての「私恥」を重んじた生き方を求めたのである。たとえば、このような「私恥」の哲学は熊沢蕃山(1619～1691)の『集義和書』に見られ、「己が心に恥てひとりしるところを慎みなば、いづれの時にか、不善をなし不義をなさんや」とある。つまり、自分自身の心に恥を知って自分しか知らないことについてでも気を付ければ、いつでも道徳的に正しいことをなし、正しい道を歩むことができるというのである。また、藤田東湖(1805～1855)は、『壬辰封事』において、「変難ノ場ニ踏カカリ、忠節ヲ尽シ、死生ヲ事トモセザルノ士ハ、太平ノ世ニ在テハ、道義ヲ重ンジ、利禄ヲ軽ンジ、心ニ恥ルコトヲ行ハザルノ人ナリ」⁽³³⁾と述べている。つまり、貴規定状況において忠節を尽くして命を顧みずに戦う武士は、平和な時代において道理を大切に、利益を軽く捉え、心に恥じることを行わない人である」というのだ。つまり、廉恥、特に「私恥」としての自分の内面に問いかける恥を知っている武士は、名誉だけではなく忠義や信義

をも備えた人間であるというのである。

このように見てくると、「公恥」が社会秩序を保つための「恥」であり、「私恥」自分自身の内面を高めるための恥と捉えることができるが、その両方を兼ね備えることが理想的な日本人の生き方の一つと言えよう。

おわりに

以上、災害大国と言われる日本に暮らす私たち日本人の精神性について、いわば日本人論、あるいは日本文化論の視点から明らかにしてきたが、最後にこれから起こるであろう大災害にむけてのわれわれ日本人の心のあり方について述べておきたい。

本論文で、明らかにしてきた日本人の自然観、災害観、人生観、社会倫理観は、個人的な視点からすると違う考えは幾らでもあり、また歴史的・伝統的な観点から述べてきたので、現代人に全てあてはまるものではない。しかし、日本人の全体の傾向として確実に私たちの精神性の一側面であるし、それに基づいた社会が今も無意識的にではあるが築かれていると言えよう。

そうであるならば、これらの精神性を意識的に高めていく努力をしなければならない。なぜならば、われわれが長い歴史のなかで培ってきた、自然と調和し、自然や人生、社会の変化を無常観として受け入れ、災害時に秩序だって行動できる精神的な能力こそが、これからの人的・社会的資源の防災力の中核を成すと考えているからである。そして、これらの精神性を高め、広めていくためには、教育が唯一の手段であり、将来起こるであろう大災害時に機能し減災を実現することになると確信している。

文献

- (1) United Nations University WorldRiskReport2014 2015年 p.64.
- (2) 気象庁HP参照 (<http://www.data.jma.go.jp>)
- (3) 国立天文台編『理科年表』丸善出版 2015年 参照.
- (4) 国土交通省HP 参照 (<http://www.mlit.go.jp>).
- (5) 同前 参照.
- (6) 前掲(2) 参照.
- (7) デカルト『哲学原理』岩波書店 1964年 p.71.
- (8) 武光誠『神道と日本神話』河出書房新社 2013年 p.16.
- (9) 高田貞治・後藤元巳訳『易経 下』岩波書店 1939年 p.230.
- (10) 和辻哲郎『風土』岩波書店 1979年 p.7.
- (11) 同前 p.138.
- (12) 廣井脩「日本人の災害観」『地震ジャーナル27』1999年 参照.
- (13) 野本寛一『自然災害と民俗』森話社 2013年 p.39.
- (14) 前掲書(12) p.49.
- (15) 同前 p.49.
- (16) 守屋淳「関東大震災後における渋沢栄一の復興支援」公益財団法人渋沢栄一記念財団HP (<http://www.shibusawa.or.jp/eiichi/earthquake/earthquake02.html>).
- (17) 『内村鑑三著作集第20巻』岩波書店 1955年 557頁.

- (18) 朝日新聞デジタル 2011年3月14日朝日新聞
(<http://www.asahi.com/special/10005/TKY201103140356.html>).
- (19) 鴨長明(市古貞次校注)『方丈記』岩波書店 1989年 p.9.
- (20) 同前 pp.22-23.
- (21) 寺田寅彦「日本人の自然観」小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集第5巻』岩波文庫 1963年 p.237.
- (22) 同前 p.245.
- (23) AFP (<http://www.afpbb.com/articles/-/2790613?pid=6951747>).
- (24) CNN (<http://www.cnn.co.jp/usa/30002136.html>).
- (25) 共同通信 (<http://www.47news.jp/CN/201103/CN2011031601001230.html>).
- (26) 大石久和『国土が日本人の謎を解く』産経新聞出版 2015年 参照.
- (27) 梶原正昭訳注『将門記2』平凡社 1976年 p.354.
- (28) 柳瀬喜代志, 他校注・訳『将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』小学館 2002年 p.501.
- (29) 新渡戸稲造『武士道』岩波書店 1938年 p.72.
- (30) 大道寺友山『武道初心集』岩波書店 1943年 p.40.
- (31) ルーズ・ベネディクト『菊と刀』社会思想社 1972年 p.258.
- (32) 作田啓一『恥の文化再考』筑摩書房 1967年.
- (33) 今井宇三郎, 他校注『水戸学』(日本思想体系53) 岩波書店 1973年 p.170.